

## 第215回 東南アジア考古学会例会のご案内

東南アジア考古学会では以下のように例会を催します。年末の慌ただしいころとなりますが、多くの皆様のご参加をお待ち申し上げます。

日時：2011年12月17日（土） 15:30～17:00

会場：昭和女子大学 研究館7階7L04

（〒154-8533 世田谷区太子堂1-7 東急田園都市線「三軒茶屋」駅徒歩5分）

発表者：俵 寛司 氏（東南アジア考古学会会員）

発表タイトル：「脱植民地主義のアポリアと考古学の可能性」

要旨：

パレスチナ出身のアメリカの批評家、エドワード・サイード（1935-2003）の著書『オリエンタリズム』（1978年）の出版を契機として、脱植民地主義（ポストコロニアリズム）の問題が、文学や歴史学、人類学等のさまざまな分野で広く議論されるようになって久しい。

脱植民地主義とは、第二次世界大戦後に脱植民地化を果たした旧植民地において残存する植民地主義／帝国主義を把握するための文化理論であり（新植民地主義とは区別）、また、旧植民地に限らず、学問、メディア、日常生活などさまざまな場に潜む、支配／被支配の権力構造を基盤とした優越、差別、偏見的な他者理解を批判するための政治理論でもある。

近年来、欧米考古学においても、この理論に基づく研究や学会が多く見られるようになり、そこでは人類学と同様、文化の語りにおける真正性（本質主義）への疑問や、生成される文化の雑種性・異種混濁性の肯定、文化を語る権利の問い直し等が大きく扱われている。しかしそれは、従来客観的・中立的とされてきた科学的学問や調査者が持つ政治性を暴露し、『現地』との対話を唱える一方、自己が依拠する学問の権威や正当性、あるいは自己の存在をも破壊へと導くようなアポリア（行き詰まりの状態）を同時に孕んでいる。

こうした状況を踏まえ、本発表においては、脱植民地主義を巡るこれまでの議論について概観し、発表者自身によるベトナム・日本での研究の取り組みを紹介しながら、「ポストコロニアル考古学」の肯定／否定ではない、考古学の可能性について思料するものである。

\*当日は例会終了後に忘年会となりますので、そちらもご参加ください。

.....

東南アジア考古学会

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1

上智大学外国語学部アジア文化研究室

丸井雅子気付 Fax 03-3238-3690